

日本南アジア学会第十五回全国大会

二〇〇二・一〇・五―六、於 東京外国語大学

平成一四(二〇〇二)年一〇月五日(土)、六日(日)の両日、本学外国語学部を主催校として、日本南アジア学会第一五回全国大会が開催された。前年一二月、会員十数名から構成される大会実行委員会が発足、準備に入つて以降、具体的実務、当日の運営にはウルドゥー、ヒンディー両研究室のスタッフおよび大学院生が中心となつて当たり、学部学生の協力も得て恙なく挙行することができた。二日間の参加者実数は二〇三名、予想を上回る活況となつた。

日本南アジア学会は一九八八年に、南アジア地域およびその地域出身の移民居住地域を対象とする研究の発展と研究者の交流を目的として創設され、毎年一回、人文科学、社会科学のみならず自然科学の分野からも研究者が集う全国大会を開催するほか、学術雑誌「南アジア研究」の刊行、英文叢書の編集等、多彩な活動を展開している。

以下、第一五回大会の概要と、当報告者が直接関与した部会に關してのみ内容にも立ち入つて少々詳しく報告したい。

第一日目(一〇月五日(土))午後一時より自由論題分科会の二つの部会が開かれ、以下のような研究報告がなされた。

○第一部会(会場・研究講義棟一―五番教室)

- 【司会・森雅秀(金沢大学)】
- 服部真理(名古屋大学)「ブネーで唄われているサンスクリット叙事詩」・「メーガ・ドゥータ」と「ギータ・ゴヴィンダ」を中心に」
- 難波美和子(熊本県立大学)「民俗学研究とインドのイギリス人たち」
- インド昔話収集の起源と影響」
- 門倉圭(筑波大学)「インド在住チベタンにおける慣習的行為としての仏教」

【司会・宮本久義(早稲田大学)】

沼田一郎(北海道大学)「Manusmiti王権論における第八、九章の意

義」

横地優子(京都大学)「スカンダ・プラーナにおける女神神話」

○第二部会(会場・研究講義棟二―六番教室)

【司会・谷口晋吉(一橋大学)】

- 宮本万理(京都大学)「プータンにおけるネーション形成」・文化・環境政策からみた自画像のポリテクス」
- 杉本浄(東海大学)「一九二二年のカタックにおける放火事件」・都市・事件・状況」
- 野村親義(神奈川大学)「企業保有史料から見直す現代インド経済史」・一九一〇―二〇年代、タタ鉄鋼所を舞台にして」

【司会・水島司(東京大学)】

- 池亀彰(京都大学)「王の取り分」・間接統治下マイソール藩王国の土地行政に關する歴史人類学的研究」
- 太田信宏(東京外国語大学 A A 研)「近世南カルナータカ地方における地域単位の変遷」

自由論題分科会終了後、一時間ほどの会員総会(研究講義棟一―五番教室)を経て、会場を大学会館一Fホールダイニングに移し、懇親会が催された。その際、池端雪浦学長から歓迎の挨拶を頂いた。

第二日目(一〇月六日(日))午前、テーマ別分科会も二つの部会が同時進行した。

○第一部会「現代における南アジアと日本の関係史」(会場・研究講義棟一―五番教室)

- 【司会・内藤雅雄(専修大学)】
- 籠谷直人(京都大学)「戦前」『日印会商』にみる日印関係」
- 佐藤宏「戦後」・初期『日印平和条約の締結過程』
- 絵所秀紀(法政大学)「戦後」・現在」・未来」『アジアの国際経済と日印経済関係』

デイスカッサントからのコメント」・古賀正則、岡本幸治(近畿福祉大学)、柳沢悠(東京大学)、辻井清吾(桜美林大)

総合討論

○第二部会「文献伝承と口頭伝承」(会場・研究講義棟 二二六番教室)

【司会・水野善文(東京外国語大学)】

下田正弘(東京大学)「インド仏教経典研究におけるオラリテイの問題」

デイスカッサント 徳永宗雄(京都大学)

児玉望(熊本大学)「サウスカナラ地方のアーリヤ語系移民コミュニティの言語と口承」

デイスカッサント 山田桂子(茨城大学)

寺田吉孝(国立民族学博物館)「ペリヤ・メーラム音楽の伝承形態の変容」

デイスカッサント 田森雅一(埼玉大学)

デイスカッサントからのコメント 総合討論

第二日目午後、全体シンポジウム「南アジアにおける『公共圏』をめぐって」(会場・研究講義棟 一五番教室)が、下記のように催された。

【総合同会・栗屋利江(東京外国語大学)】

中里成章(東京大学)(問題提起)「南アジアにおける『公共圏』概念の位相」

足立享祐(東京外国語大学)「南アジアにおける『公共圏』の成立とその性格」

デイスカッサント 井坂理穂(東京大学)

喜多村百合(筑紫女学園大学)「『公共圏』とジェンダー」

デイスカッサント 長崎暢子(龍谷大学)

関根康正(日本女子大学)「草の根の『公共圏』」

デイスカッサント 三尾稔(東洋英和女学院大学)

押川文字(国立民族学博物館)「中間層と『公共圏』」

デイスカッサント 井上貴子(大東文化大学)

デイスカッサントからのコメント

総合討論

二日目午前のテーマ別分科会第二部会「文献伝承と口頭伝承」について、やや詳しく紹介しよう。

テーマ設定の趣旨は、文献学と他の方法論との相互補完の可能性を探ることにあつた。「印度学仏教学」という名のもと我が国はインド文献学の長い歴史と多くの蓄積を有してはいるが、更なる学術発展を図るためには、文献学一辺倒に固執することなく、他のディシプリンとの連携を模索する必要があるのではないかといった反省に基づき、多分野の研究者が一堂に会する当学会の特色を加味して案出された主題である。研究報告者三名の専門分野は、仏教学、言語学、民族音楽学。二時間半という限られた時間では、最大限のパラエティーとなつた。

まず、仏教学の下田氏は、オラリテイという主題が仏典研究に取り入れられることによつて、これまで描かれてきた仏教史の内容が大きく変わることが予想されるとして、ミルマン・パリ、ウォルター・J・オング、W・グラハムなど異領域ながら普遍性を有する論考や、近年オラリテイとリテラシーの区分という視点の重要性を意識して研究を進めている西洋の著名な仏教学者たちの存在を紹介した。その中には、大乘仏教の興起は書写という行為に基づくというR・ゴンブリッジ(オックスフォード大)などの説も含まれていた。氏は、パーリ仏典、アビダルマ、律蔵、さらには専門の『涅槃経』を初めとする大乘仏典に言及し、暗唱と書写(増校)という観点からそれぞれの特徴を概観、大乘仏典においては、暗唱の実行者としての出家者、書写の担い手としての在家者という構図が描かれることを指摘し、テキストのオラリテイとリテラシーの両側面を意識する必要性を主張した。

つぎに、言語学の児玉氏は、インド西海岸南部のドラヴィダ系言語(トゥル語、カンナダ語等)を母語とする地域に居住するインド・アーリヤ系移民の数々のコミュニティが大言語の他にそれぞれ独自のコミュニティ言語(無文字)も保有し、全く系統の異なる言語接触ゆえの、保守性、変容、特異性を紹介し、口頭伝承された文芸、舞踊や通婚形態等の社会制度など人類学的視点から分析しながら、移民コミュニティが継承、創造している言語文化の事例を報告した。

民族音楽学を専攻する寺田氏は、南インドの代表的ヒンドゥー儀礼音楽ペリヤ・メーラムが、全く文字を介さず、弟子が師匠の家に住み込んで、まさに門前の小僧のようにして習得するという伝承形態を実写ビデオを用いて紹介。その根拠が長時間の即興演奏といったその音楽の特徴にあることを指摘した。そういった伝統的伝承形態が二〇世紀中庸の音楽学校の開設によって短期間での習得が可能になったこと、およびその音楽自体の変容（即興からレパートリー）とによって、一変してしまっただが、一九七〇年代のカセットテープの普及が、ふたたび即興演奏を繰り返し聴いて習得するという方法をもたらし、その点で旧来と一部擬似的要素を持つものの、全く新たな伝承形態を生み出していることを報告した。

以上の各報告に対して、デイスカッサントの三名がコメントを加え、フロアーも交えて予定の終了時刻を三〇分以上超過するほど活発な討論となった。ただ、三者の分野の隔たりが大きすぎたため、個別の議論が多かった。それでも、討論の終わりの方では、三者に共通する観点からの指摘もなされた。それは、オラリテイという形態が個人レヴェルではその対象（テキスト、言語、音楽）の内化を促進させ、集団レヴェルでのアイデンティティ強化に連なる、一方リテラシーは対象の拡大をもたらすといったことであった。

これを契機に様々な分野の連携が一層深まり、それぞれの研究がさらに発展することを望んでやまない。

（報告者／南・西アジア課程 水野善文）

